

広島平和記念資料館で感じたこと

南宮中学校 3年 大浦日南乃

私たちは、三日間広島で原爆のことや平和について学びを深めてきました。

8月4日に平和記念資料館に行きました。入ってすぐに、当時原爆が落とされ建物が一瞬で崩れていく様子を、プロジェクトマッピングで表現されている展示物がありました。見学を進めていくと『「助けて」「水をください」動く気力もない母親の胸にすがる幼児。』や『「目を開けて、目を開けて」子どもの名前を呼び続ける半狂乱の母親』などの、当時の人々の助けを求める叫びが表現されている絵や、くっきりと人影が焼き付いたコンクリートが展示されていました。それらを見たとき、原爆が落ちた一瞬で人々を消し去った情景が見られ原爆の激しさを目の当たりしました。そして、私が一番印象に残った物は、原爆によってぼろぼろになってしまった服や小さなパンツ、溶けてさび付いた三輪車、ずっと大切に握りしめていたベルトなどを見たときでした。多くの尊い命を簡単に奪うことの出来る原子爆弾。何ともいえない感情になりました。



平和記念資料館見学後、原爆ドームを見に行きました。真上から原爆を落とされた衝撃により、屋根の部分は鉄骨だけになってしまっていたものの他の部分は残っていました。爆心地からとても近かったのにも関わらず、今もなお残っている原爆ドームは、あの日広島の人々が助けを求め、川が真っ赤に染まり何も無くなってしまった街のことを後世にも伝え、誰もが笑顔でいられる平和な世界を願っているように思えました。それから、原爆の子の像に千羽鶴をお供えしてきました。たくさんの千羽鶴が飾られていました。もう二度と同じことが起こらないように、戦争がこの世の中からなくなることを祈りながら、千羽鶴をお供えしました。



あの日、約14万人の死傷者を出した広島原爆。二度と同じことが繰り返されてはなりません。被爆者の方々からお話を聞ける貴重な機会もなくなってきてしまいます。これからの平和な世界を担うのは私達若者です。そのために、まずは、原爆についてより多くのことを知らなくてはいけないと思いました。

私は、今まで広島原爆が8月6日に落とされたことしか知らず、原爆がどれほどの威力を持ち、どれほどの人々を長年苦しめてきたのか何も知りませんでした。本やインターネットで原爆について学びを深めるなか、痛々しい人々の傷や、何も無くなってしまった町を見たときは目をふさぎたくなりました。ですが、この三日間の研修を通して、8月6日キノコ雲の下で実際に起きたこと、翠町中学校の方々と交流、被爆者の方から貴重なお話などから、多くのことを知り、学ぶことができました。そして、これからも、もっと原爆について、平和について、知らなくてはいけない、考えなくてはいけないと思いました。

被爆者の方はこのような言葉を残しています。

「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。

この苦痛は、もう私達だけでよい。」

平和な未来を担う私達は、この言葉を絶対に裏切ってはけません。

ヒロシマ青少年平和の集いに参加して

南宮中学校 3年 小林さくら

私たちは、8月5日に「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加してきました。

あいさつや参加団体の紹介があり、その後の中・高校生ピースクラブによる原爆被害の概要説明がありました。「ヒロシマを知ることは未来を考えること」と書かれた学習ハンドブックをもとに、原子爆弾の開発から放射線による被害まで詳しく説明されました。



説明の中で特に印象に残った言葉は、「人類は核兵器と共存できない」という言葉です。世界には未だ1万3000以上の核兵器が存在しています。原爆の恐ろしさを世界の人々は知りません。私も同じです。ですが、被爆者の方々の平均年齢が80歳を超える今、核兵器の、戦争の、恐ろしさを伝えていかなければならないのは私たち若者です。戦争のこと、原爆のことを少しでも多く学び周りの人々と平和を考えていきたいと強く思いました。

概要説明が終わると、次は被爆者の方のお話を聴きました。話してくださったのは、当時14歳だった山本定男さん。被爆者の方のお話を実際に聴くのは初めてだったのでとても緊張しました。空地の草取りをしていたという山本さんは、投下直後何が起こったかもわからないままものすごい光と爆風で草むらに投げ倒されたそうです。辺りは真っ白でしーんとしていたといいます。町の中では火災が起こり、道端では骨が燃えていたそうです。

お話が終わった後に質問できる時間があり、「原爆を投下したアメリカに憎しみとかってあるんですか。」と質問している人がいました。山本さんは、「もちろん憎んでいる。日本が敗戦を宣言した後も戦争を続けたことを一番憎んでいる。だが当時の日本も反省するべきだと思う。」と答えていました。戦争による被害を受けたのは日本だけでなく、どの国も同じなんだということも考えました。山本さんのお話の中で何度も出てきたのは、『伝える』という言葉です。「世界の人々は原爆のこわさを知らない。それを教えなくてはいけない。それが世界の平和につながるから。若い人たちが伝えていかなければいけない。」ということ聴いて、自分はすでに伝える立場にいるのだ、という責任を感じました。



被爆者の方のお話の次は、グループごとで「原爆の記憶を風化させないためには」をテーマに話し合いをしました。知らない人との話し合いで不安が大きかったのですが、同じグループの人たちはどの人も積極的で、不安は徐々になくなりました。私のグループでは、まず若い人の平和への意識を高める必要があると考えました。そこ

から、SNSや文化祭を利用して伝える、全国の中学生が集まって平和について話し合う、被爆者の方や戦争を体験した方の話を聴く、そして広島へ行く、という考えが生まれました。被爆者の方や戦争を体験した方を地方へ呼びしてお話していただくのもよいかもしいという考えも生まれました。ほかのグループでの発表では、被爆者のお話を残していく、他人ごとにしなくて身近な人と話してみる、VRや3Dなど現代の技術を使って映画などを作る、このような会が開かれていることを広める、など様々な方向から見た考えが生まれました(その他に出た意見は最後にまとめてあります)。同世代の方々と話すのはとても新鮮で、少し表現が違ってもいいかもしれませんがとても楽しかったです。世界中の人々がこうやって平和について考え、それを行動に移していけば、世界は平和になると思います。いろいろな意見について向き合い、認め合うことが大切なのです。

「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加して、自分たちが出来ることは何かを考えたり、被爆者の方のお話を聴いて事実を知る事が出来ました。自分が知っていることはほんの一部のことかもしれませんが、これから家族や友達、全校生徒や地域の人々に伝えていきたいです。

最後に、広島に行くことが出来て本当によかったです。また行きたいと思います。

ディスカッションで出た考え

- ・原爆ドームなど被爆した建物を残していく
- ・自分の意見を伝えられる場をつくる
- ・漫画やアニメを使う
- ・映画や本をつくる
- ・戦争や原爆に関する動画を作って、ネットに配信する
- ・修学旅行は広島に行く
- ・学校内でポスター掲示
- ・道徳の授業などで平和学習
- ・ビデオを見てもらう
- ・新聞にまとめたり、メディアで取り上げたりする
- ・言葉で、書いて、写真で、伝える・身近なことで平和を考える
- ・平和記念式典などを残していく
- ・次世代へ伝えていく
- ・日本で知識を深め、それを外国へ伝える
- ・当時のものを残していく
- ・8月6日に各地でイベントを行う
- ・サイトや番組を作る
- ・テレビ電話で各地と被爆者の方をつなぐ
- ・絵に描いて残す
- ・実際に感じる、触れる
- ・身近な人と話す、共有する
- ・Youtubeに動画を投稿し、利益を寄付する など



翠町中学校との交流で感じたこと

南宮中学校 石澤 凌

僕達は8月5日、広島市立翠町中学校の生徒会役員の方々と、平和について交流しました。

1945年8月6日、翠町中学校(1945年当時は第三国民学校)は、原爆の被害を受けました。被爆当時、翠町中学校の生徒、教職員は爆心地から約1kmの場所で建物疎開作業(火事などが起こった場合にそれ以上燃え広がらないように周辺の建物を壊すこと)をしており、原爆の被害を直接受け、のべ210人の尊い命が失われました。このお話を聞き、原爆によるは絶対に惨劇は繰り返してはいけないものだとは再確認しました。

翠町中学校では、このような原爆の被害を風化させないために、慰霊塔を建て、さらに、昭和48年からは、校内慰霊祭を行っています。また、『第三国民学校の被爆実態を明らかにする運動』という運動を行っています。これは、『戦災死児童学籍簿』という、被爆した児童、教職員の生徒名や住所、死亡月日などが記入されたものが発見されたことがきっかけで始まりました。

『戦災死児童学籍簿』には、書かれていない項目が多くあり、そのまま放置すれば、詳細が永久に不明になってしまうと考えた、当時の生徒会が中心となって、教職員や地域の方々と協力しながら、被爆した児童の遺族のもとを訪ね、被爆状況を聞き取りながら、被爆実態を明らかにしていきました。こうして集められた証言をまとめたものが、『空白の学籍簿』です。そして、『第三国民学校の被爆実態を明らかにする運動』は、今でも遺族捜し運動として継続されています。

このように、広島県で、戦争について様々な活動が行われている中で、私たちが住む長野県では、年々戦争の記憶が風化しつつあると感じます。

実際、南宮中学校の生徒に対して行ったアンケートでは、広島に原爆が落とされた年月日を知らない人が66%、長崎に至っては、79%という結果が出ています。戦争の惨状は、絶対に忘れてはならないものです。しかし、長野県を始め、多くの県で、戦争に対する意識が薄れているのではないのでしょうか。

このような状況を打破するためには、何か対策をとらなければなりません。例えば、義務教育課程で、平和についての学習を必ず1回はする、というのはどうでしょうか。現に、広島では、早くて幼稚園の頃から平和学習が行われています。広島の平和に対する取り組みを見習い、少しずつでも実践していくことで、日本全体の平和への意識が、向上していくのではないのでしょうか。

今回翠町中学校の皆さんと交流して、広島の人々と自分たちの平和への意識の違いを目の当たりにしました。今回の交流を無駄にしないために、まずは自分たちから、友達、家族など、身近な人達に、学んだことを伝えていきたいと思えます。



平和祈念式典に参列して

南宮中学校 出川 瑠惟

僕達は8月6日広島平和記念式典に参列しました。普段はテレビでしか見たことのない平和記念公園(記念式典)でしたが、実際この場所に居るとテレビでは思えないようなことを思うことができました。

黙祷では『世界に核がなくなり、戦争がおきなくなり、永遠に平和になりますように』と願い、一分間黙祷をしました。

平和宣言では広島市長が『若者に実際に被爆者の話を聞いてほしい』と訴えています。この言葉を聞いて僕も同じ事を思いました。ただ「広島に原爆を落とされた」という認識だけをしている人が多く、この時の状況を知っている人は年々少なくなっていると思います。僕は被爆者のお話を聞いて1945年8月6日の悲惨さを知り、「二度と起きてはならない事である」と再認識しました。



また、当時15歳の女性は「一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止める事が出来ると信じています。」と語っていました。世界では未だに核を製造、保持する国があります。それは許されない行動であり、核を有している国は「平和を願ってはいない」そのように思うことしか僕にはできません。

平和への誓いでは小学六年生の児童2人が『二度と戦争を起こさない未来のために』と訴えています。そのためには、今ここにある物を未来へ残していくことが大切だと思いました。そして被爆者の話を聞き、地域の方々に伝える事が大切だと思いました。

『大好きな故郷』を戦争から守るためにはやはり「核爆弾や武器などを製造しない」ことが第一の目標だと思います。内閣総理大臣のあいさつで「非核三原則」に触れられてない所を聞くと僕は「本当に平和を願っているのか?」「本当に非核を望んでいるのか?」などの様々な疑問をもちました。

また、記念式典の生中継を行っていたのは全国ではNHKのみであり、他の放送局は普段通りの放送を行っていました。しかし広島市は全ての放送局において中継が行われていました。「なぜ全国の放送局で記念式典を中継しないのだろうか。」僕はそう思いました。原子爆弾についての意識が薄くなっている一つの原因に、テレビなどのメディアで取り扱う機会が少ないことも考えられると思います。

当時の状況を知らない私たちでも実際に被爆地を訪問したり、被爆者のお話を聞いたりすることで、当時の悲惨さを知る事ができると思います。また「どうすれば風化させなくてすむのか」などの疑問を持ち、答えを導きながら訪問したり聞いたりすることでより一層学ぶ事が出来ると思いました。この派遣学習で僕は戦争のことや原爆について詳しく知る事が出来ました。今回の学習を通じて地域の方々や学校の生徒に伝えたいと思います。